

## 鎮魂と懺悔の

思いに嘖まされて

佐賀県 丸山菊夫

## 敗戦時の状況

私は、太平洋戦争終焉までの五年間を、南支派遣軍・鐘馗兵団に属し、広東省内で戦闘中であつた。このため昭和二十（一九四五）年八月十五日の終戦の詔勅の伝達はなく、その後も我が第三百十師団長・近藤新八中將は断固停戦を拒絶し戦闘を続けた。そして終戦処理のため接收に來た中国第二方面軍司令官・張發奎將軍は、その処理に困り、我が南支派遣軍（第二十三軍）に打開策を委ね、ようやく停戦が実現したのは、十月終わりであつた。

## 武装解除

無条件降伏による武装解除によって、菊の御紋章入りの各種兵器は没収され、無造作に積み上げられてゆくのを見た屈辱感は深刻であつた。武装解除の目的は、日本国が再び軍事大国にならないために兵器類に限られていたが、中国側は、我が將兵の私物や懐中物まで没収に及んだ。

武装解除による心身的打撃は、敗戦の屈辱とまだ戦えるという意識が渦巻き戦勝国への反感は募るばかりであつた。しかし戦争は終わったのだ、これからは平和な時代がやってくるという気持ちと共に、祖国日本の将来に一縷の希望を抱いた。

## 捕虜收容所の生活

武装解除後、我が師団は中山県羊額の市街地を流れる珠江の河岸に建つ倉庫街に收容された。珠江は北の黄河、中部の揚子江（長江）と共に、中国を代表する大きな河で、下流は数百メートルの川幅があり、広州の街をゆっくり通り、さらに数

百メートル経て、南シナ海に流れていた。

この珠江を遡って、船舶が広州まで荷物を運んでいるが、この周辺はデルタ地帯であるため、船舶以外の往来はなく、日本兵が集団で暴動を起こすことは困難であった。

街はずれの川に架った橋には、中国軍の警備兵七、八人が一団となり我々の收容所を監視していた。この周辺は広漠たる草原である。ここを耕して、祖国に帰るまで自活のため野菜を作り、そして炊事場で料理を作った。

收容所内の兵士は体がなまらないように、黎明の星が輝き、まだ辺りが暗い頃から思い思いに体操やランニングなどをして、帰国に備えた。收容所では閉ざされた塙の中で身動きのできない程すし詰めされた雑居部屋で、単調な生活の中で祖国日本の現状を憂いながら再建の意気に燃えた。

戦勝国側はたびたび我が方に労役作業に従事するよう命じた。初めのうちは道路清掃など比較的軽度なものであったが、次第に川の浚渫や便所の

汲み取りなど重労働となった。師団長・近藤新八は、全將兵を健康な体で帰国させなければならぬと、危険な作業で無駄死にさせてはならない、これまで国のため尽くした兵士達に今更惨めな思いをさせてはならないと便所掃除などは極力これを拒否した。

#### 所持品検査

終戦に際し、支那派遣軍総司令官岡村寧次大將は、中国軍蔣介石総統との協定で、日本軍將兵が所持している物品は、すべて持ち帰らせることにした。蔣介石総統は、日本の陸軍士官学校で学んだ人だから、かなりの理解があった。また我々も、敗戦国日本の荒廃と、物資の欠乏を深刻に受け止めていた。

中国の接収部隊は頻繁に日本軍將兵の所持品検査を実施した。我々は廟の広場に將校は行李を、その他は雑嚢を広げて待っていた。検査は少佐を長とする約十人によって実施された。はじめ將校

が一つ一つ丹念に調べて気に入ったものがあれば没収し、これに続く兵士も同じ事をする。

これを拒むことはできず、ただ見ているだけである。トラブルを起こすと、帰国を前に犯罪者扱いにされるからである。我々が帰国の時、持ち帰れるのは一人八日分の主食と飯盒、水筒に限られ、書類などその他は一切禁止された。

ある時の所持品検査中、室内から出てきた近藤師団長が大声で「一物たりとも渡すでないぞ」と叫ぶと、中国検査将兵は、その氣勢に圧倒され検査もそこそこに引き揚げてしまった。検査終了後師団長は全員を集めて「お前達は今からこんな意気地のないことでもうするんだ。帰国まであと何年ここにいるのか解らんのだぞ、私物まで取られて何故黙っているのだ」と怒鳴られた。

### 中国全土に拡がった日本人排斥運動

満州事変以来、十四年の長期にわたり、日本国民が中国国民にあたえた遺恨に対し、中国国民は

復仇の念を現わにし「日本軍民を戦争犯罪者として厳罰にせよ」と中国全土で騒ぎ始めた。

事態を憂慮した蔣介石総統は中国国民に対し「われらは、終始一貫、侵略をおこそうとする日本軍隊のみを敵とし、日本国民は敵としない。打倒された日本軍は一切の降伏条項を忠実に実行するよう厳重に監督すべきであるが、決して報復したり、無辜の国民に侮辱を加えてはならない。彼らの軍部に愚辱駆使されたことを同情せよ。日本軍人の退去に対して暴行をもって応え奴隸的侮辱をもって誤れる優越感に報いるならば、怨みは更に怨みを呼び、永遠に留まることがない」と布告した。しかし、こうした主旨は下部まで徹底せず、この騒ぎは治まらなかった。

### 民主主義の国アメリカ

事態を深刻に受け止めた占領軍当局は、アメリカ軍キャッチ大佐をしてこの暴動の鎮静化を図った。このキャッチ大佐は、どんな些細なことも

事件が起こると、単身ジープを走らせてきて、相手が誰であろうと区別せず平等に扱って処理した。私はこれを見て、民主主義の国アメリカの素晴らしさに驚くと同時に感動した。

### 中国国府軍と共産軍の抗争

広州地区の日本軍部隊の接收にきたのは、中国第二方面軍、張発奎將軍輩下の新一軍と第六十四軍であった。軍司令官の張將軍は広州市生まれで、季濟深將軍直系の部下として勢力をのびし、これまで柳州・南寧などの司令官を歴任し、雲南では米軍式装備を充実して、米軍式戦法の訓練を受けたが、これを把握できないまま接收部隊として広東に派遣された。

中国軍はこれまで、蔣介石と共産軍の毛沢東軍は一致して日本軍と戦ってきたが、終戦後は共に勢力拡大を狙って分裂し、共産軍に対し劣勢な蔣介石軍は日本軍と共同して共産軍と戦うことを策し、我が軍に下士官は將校で、下級將校は上位の

階級で待遇する旨申し入れてきた。

### 朝鮮出身兵の暴動

大本営は昭和二十年二月、米軍支那大陸西沿岸に米軍上陸公算大とみてこれを迎撃するため、内地から約二万の兵力を増強した。その中には朝鮮出身兵六百人が含まれていた。我が將兵は米軍上陸阻止の陣地構築をしてこれに備えた。しかし米軍は、支那大陸ではなく沖縄に上陸し、増派された兵力は遊兵となり終戦になった。

これら朝鮮出身兵は「我々は戦勝国の国民だ。敗戦国日本の兵ではない」と騒ぎ日本軍とは別行動をとり出したので、十二月六日彼らをひとつの地区に集め、中国軍側がこれを管理することになった。そこを日本軍の將兵が通ると、集団で袋叩きされる事態が発生した。

一人の病死生をめぐって

内地帰還を目前にして、一人の日本兵が収容所

内で病死した。部隊では遺品として、爪を切り、庭の隅に懇ろに葬った。人員、武器に変動があった場合は、中国側に届け出ることになっていた。

このため蜂谷参謀が届けると中国側は、日本兵が共産軍に投降した疑念を持ち、真実を確かめるべく、墓地を掘り起こすと言いつ出した。これに対し日本軍側は「死者を冒瀆する行為だ」と反対した。それでも中国側が承知しないので、同参謀は「もし死体がなかったら中国側が責任をとれ」と申し入れ事態は紛糾した。

師団長は事態が大きくなる事を避けるため石川参謀長と吉村参謀の二人に交渉役を交代させたが、それでも日本軍の態度が変わらないので、中国軍は渋々納得し、我が軍の主張どおり解決した。

#### 戦闘を起こしかねない事態発生

私は武装解除後、しばらくしたある日、隊員三十五人と共に、共産軍と土匪襲撃に備え收容所の

周囲に壕を掘り、土嚢を築き警戒していた。武装解除後も、日中双方の取り決めで、わが軍には十人に一人の割合で銃と弾薬の所持が許されていた。

夕暮れ時「日本兵一人が、中国巡邏隊に拘束連行中である」という報せで、私は単身銃を持って現場に急行し、中国側に「何故の連行か」と訊ねたが明確な返事がないので、待機している隊員に「もし相手がこちらの釈放要求に応じないで発砲したら応戦せよ」と命令した。

中国側は、こちらの要求に応ぜず、連行しているの、私は連行されて行く日本兵の背中を押し「早く兵舎に逃げ込め」と怒号して銃を構え、中国側が発砲すれば、こちらも応戦するという一発即発の状態も、不意を衝かれた中国側は手出しできず、私は連行された日本兵を連れ戻すことができたが薄氷を踏む気持ちだった。

## 何応欽上將と田中軍司令官の密談

蔣介石国民党總裁から日本軍との終戦処理の全権を委任された何応欽上將が広州市河南の拘留所に、戦争犯罪容疑で投獄されている我が南支派遣軍軍司令官田中久一中將を訪ねて、密談を交わしていることが我々の耳に入った。

何応欽上將は、日本の陸軍士官学校で学んだので日本語が上手で、二人の会合は通訳なしで行われた。席上、何応欽上將は「私達の本来の敵は同じ中国の共産党だが、不幸にして日本軍との長い戦争で共産党に対策を怠っていた。これから本格の掃共作戦を実施するのは是非貴軍隊の援助を願いたい」という内容であった。

この要請を受諾すれば、田中中將は戦犯の罪を免れ、超一流の待遇を受け、また参加軍隊も敗戦の恥辱を受けずに済んだに違いない。しかし、これに応ずれば日本軍軍司令官として大本営即ち天皇の御稜威に背くものとして、終始首を縦に振らず、この密談は不調に終わり、香港で部隊兵士が

おかしな英軍パイロット斬首事件の責任を負わざれ処刑されたのである。

この南支派遣軍軍司令官田中久一中將は私の直属の上官で、彼には多くの美談逸話が残っている。

田中軍司令官は仏印進駐部隊司令官から我が南支派遣軍軍司令官に転任してこられた知将型の軍人で、酒は飲まず、軍服より背広を着てステッキ姿が似合っていた。軍司令官は非戦闘員や捕虜の取り扱いについては細心の気配りが見られた。

長沙攻略戦で同地を占領した時、軍の入城を一日延期した。その理由は戦鬪の余勢で入城すれば、血気にはやった兵士が略奪、強姦などの犯罪を起こし兼ねないと見て、一日城門外で野宿させ、翌日入城させる手筈にしていた。これを知らずにアメリカ軍機は、日本軍が城内にいるものと誤認して城内を爆撃した。これで日本軍は思わぬ命拾いをしたという戦訓がある。

もう一つは、昭和十九年秋頃、汕頭の独立混成

第十九旅団（のちに第三百十師団）の山砲一個中隊が、広州南西江門付近を警備していた時、同隊の一人が民家に押し入って強盗を働き、被害者が訴え出て、兵士は憲兵隊に逮捕され、軍法会議で刑が確定した。

それから数日して、中隊長作田正夫大尉は兵に会いに広東の町へ行っていた。そこへ南支派遣軍の車がきて、作田大尉を迎えにきた。一時間かかって戻ると、そこに田中軍司令官が待っていた。

作田中隊の兵士が強盗を働いた事は、軍司令官まで報告され、それを聞いた軍司令官が犯罪を犯した中隊に直接訓示にきたのである。中隊長以下全員を集めた軍司令官は一同に「我々はいつまでもこうして一箇所に駐留していいのではない。いずれこの支那大陸の南方各地に転戦するであろう。その時現地の人々に日本兵は正義のため戦っていることを実感して貰えれば、この戦争の目的は達成される」と、この中隊の不法行為を責めず

諄々と諭した。

このように、軍紀の維持を強調する田中軍司令官が、敗戦の時、部下のなした行為とはいえ捕虜虐殺の罪を問われ処刑されたことを聞いた私は、あれ程現地住民のことを思い、愛護に努めた將軍なのに何故だろうと痛恨やるせない気持ちが生じた。

#### 拉致された兵士の奪還

捕虜の身であることを認識しながら、我々は心情的に、ただ単に「集中營」とだけ呼んでいた。

この集中營を、単身ひそかに脱柵した一人の兵士が、民家の軒下で所持品と食料品と交換しているところを、中国軍巡察隊に捕まり、彼らの駐屯兵舎に連行された。当時の中国では靴下片方でも煙草や駄菓子類と交換できる位だから、死者が纏っている衣服でも交換価値があった。

中隊長本田義弘は連行され、中国側に匿われている兵士を連れ戻すべく、単身敵地へ乗り込ん

だ。途中、中国兵に銃剣を突きつけられても、これを払いのけ颯爽と敵本陣へ乗り込んだ。度肝を抜かれた中国側は金品を釈放の条件としたが「我々は敗戦国軍隊そんなものは一切ない」と拒否した。

飽くまで金品を主張し続ける彼らに「これで勘弁してくれ」と拉致された日本兵の顔面を数回殴り、呆気にとられた敵兵を尻目に、悠々と引き揚げてきた姿は勇敢そのものだった。

#### 中村次喜蔵中将の自決

我が鐘馗兵団がまだ潮兵団であった頃の兵団長中村次喜蔵少将が、中将に昇任して、満州の第一百十二師団長として在任中、突如のソ連の参戦を前面に受け、同師団は壊滅的狀態となり、中村師団長は敗戦の責任をとり、昭和二十年八月十八日、揮春で割腹自決された事を知った。師団長は金鶏勲章を二つも持つ将官であって、私は旅団司令部勤務中篤き指導を受けたが、温情ある將軍として

部下から尊敬されていた。ご冥福を祈っている。

#### 赤坎事件

我が南支派遣軍が、戦争犯罪に問われた事件は、昭和十九年に独立混成第二十二旅団が、台山事件と、昭和二十年七月に我が第三百十師団が赤坎で七人の中国軍捕虜を虐殺したという事件である。しかしこれは中国側の一方的な報道で真実ではない。

私はこの作戦に機関銃、擲弾筒、無線班を配属した四十人の変則一個小隊を率いて参加する事になった。昭和二十年七月といえば敗戦が囁かれており、私は准士官試験に合格したがまだ下士官である。部隊では今後のため経験を積ませたい配慮があったにせよ、敗戦間近になった現在、その時期になって責任をとりされるのは嫌だという将校等のために、私に有難くないお鉢が廻ってきたのだと想像された。

私には「赤坎右翼の魚頭山を攻撃して確保せ

よ」というのが部隊命令であった。この戦闘は激烈を極めたが、一人の負傷兵を出したのみで他の損傷はなく、直ちに陣地構築していると、白旗を掲げた複数の敵兵の軍使がやってきた。その密書を見れば、我が軍に武器を棄てて投降せよという内容だった。私は之を拒否して、これを退去させた。この二人の姿が見えなくなると、これに追隨してきた本隊が集中攻撃してきたので、応戦撃退したあと、住宅街から食糧調達した。しかしこのままでは略奪行為になるので所持している軍票を紙袋に入れて立ち去ったが、敗戦後に責任を問われることはなかった。

戦後戦犯問題が浮上したのは、私の部隊の左翼戦線の赤坂であった。ここはもと我が第三百師団司令部があった北衛より五〇キロ南西の師団右翼の三埠一帯の中心都市である。

我が師団は赤坂辺りを根城にしている海賊を掃討するため、七月下旬、宇宿支隊が大々的に作戦を行うため、六個大隊中四個大隊がこれに参加

し、師団が汕頭から広東に移動して行った特別大きな作戦であったが七人の捕虜を虐殺した事実は無かった。

中国は、突然勝利国となって、日本軍と戦い抜いた英雄話が急遽あちこちで作りに出されたようだ。この作戦を指揮したのは宇宿大佐で堀本大尉は第一中隊長として、中国人が訴えた場所にいただけである。これを朝鮮出身兵の事実なき密告により事件となったのである。

この作戦を実行したのは大隊長であり、彼はすでに内地に帰国し、この事件の証言のため残った堀本大尉が責任を負わされたのである。この事を知った大隊長はすぐ、堀本大尉の生家に行き大事な部下を死なせた事を詫びたという。

#### 親日的な中国軍通訳官

河南の拘留所から広州の市街地までは、たんみん蛋民が漕ぐサンパンで珠江を渡るのであるが、サンパンの漕ぎ手は女が多く、彼女らは日本兵に対しては

協力的であった。サンバンから降りて、大平路と惠愛路を通って行く。中国軍司令部は終戦まで、我々日本軍の軍司令部とした所である。その前面に広東省政府がある。

急造された軍事裁判所の建物は天井には大きな穴があき、南国特有のスコールがくると法廷内は忽ち水浸しになり、裁判は度々休みになった。

法廷は裁判長のほか、判事が二人、通訳が二人、一応弁護士もつけられたが、それは形ばかりで出廷しないことが多かったという。裁判官が並んでいる階段のうしろは、うす暗いベニヤ板壁になり、その向こうは警備兵の控室になっており、法廷まで話し声が響いて騒がしい事が度々あるという。

裁判は概ね四回位で結審していた。裁判長は劉という少将で、通訳官は曾広科大佐と蔡仁麟大佐であった。曾大佐は、慶応義塾大学を、蔡大佐は早稲田大学を卒業して、共に日本語は流暢で、日本国内の知識は普通の日本人より詳しい位であっ

た。

兩大佐は戦争中、張第二方面軍司令官の秘書兼通訳をしていた。蔡大佐は母親が大分県生まれの日本人だったので、彼には日本人の血が流れていた。兩大佐は自分達は裁判の通訳に適任だと希望して通訳官になり、給料日には餅や菓子類を買って監獄の日本兵に差し入れ、裁判中裁判官から聞かれて答えができなくても裁判に関係ない事でも答えれば私がうまく裁判長に通訳すると便宜を計ってくれた。

中国の裁判起訴書は事実記述のほか、いかに残酷非道であるかという文学的表現の技巧が必要である。蔡大佐は日本語で書いたものを中国語に書き替え減刑になるように助力してくれた。このような両通訳官の助力を拘留中の日本人は深く感謝していた。

#### 苦難の労役作業

占領軍は、我が軍に対しさらに千人の作業員を

派遣せよと命令してきた。近藤師団長は国際捕虜規定どおりの労賃を支払えと強硬に主張したが、実現のないままの出発準備となった。

作業団の編成は難行した。日本の軍隊が軍紀厳正といわれたのは過去の事、敗戦、武装解除、中国軍の所持品の強奪没収、給与栄養の低下、帰国の見通し困難、相次ぐ理不尽な判決と処刑、外部情報の不明などの悪条件下では、日を追って軍紀の退廃は目に見えており、隊員達は暴力をもって上官に反抗した。これに対しかつての上官達は気の毒なぐらい落ち込んでいた。

この惨状は上の将官から、下は一兵員に至るまで、地位の上下、年令の老若、武装の熟達、未熟とは関係がない。天稟か、育ちか修養のいかんによるものだった。とにかく出発を急がねばならぬ。井上岬准尉が作業隊の人選に苦慮しているのを見兼ねた私は、自ら申し出て作業隊の一員となり、隊員には云々を言わせず、強硬に出発した。

工事工程の説明には、派遣軍の富田参謀と占領

軍側から米軍のキャッチ大佐が担当した。我が作業団は、宇宿大佐を長として蜂谷参謀が指揮をとった。出発に際し、近藤師団長は蜂谷参謀に「兵隊は帰国して、国家再建のため働かねばならない大事な体だ、無理して怪我や病気をさせないように注意せよ」と言い渡した。

作業現場までは、陸地と船を乗り継いで三日目によりやく目的地に着いた。この地方はしばしば水害に見舞われ尊い人命を失い、農作物は皆無の状態で、住民は生活難に喘いでいた。

作業の場所は、広東西側の「高明」で堤防構築する事になった。我が軍はもと宮崎県土木部長の経歴をもつ専門技師がいて、はじめのうちは、工事は順調に進展した。

ところが、敗戦後も命令一下何でもやらせようとする融通のきかない、古い型の将校、下士官が無闇に威張るのに兵達は堪えられなくなり反抗の態度となり、険悪な状況になった。私はこれら同僚の指揮官に対し「もはや、この集団は軍隊では

なくなった。軍人とは思わず、一人の人間として融和を図らねば取捨ははかれない」と忠告した。

我々の作業は、食糧不足と、日々課せられるノルマで、毎日腰まで水に浸かっているの難作業には、病人が相次いだ。それに主食は赤米で味覚に乏しく、消化不良で胃腸障害になった。それに主食の配給米は、中国軍の常習的ピンハネにあった。これを抗議すると彼らから、足腰が立たない程殴られたりした。副食には、肉、魚などは殆どなく、生野菜を塩炊きしただけのものだった。

これを知った近藤師団長は、占領軍側に抗議したが改善されないため、師団がかねて自活用に飼育していた牛、豚、鶏を食用として届けてくれたので命をつなぐことができた。

占領軍側は、作業効率促進のため頻繁に巡察隊を派遣し見張りを続けた。その時は作業を一時中止し全員整列し巡察隊に服従の敬礼をせよと命令した。これは、戦勝国のプライドと、服従心を表現させるものだった。こうして時々作業を中断す

るために、作業は予定通り進行せず、罰として食糧が減配された。

ある日、降雨激しき時に、また巡察の一行がやってきた。それに気付かず作業中欠礼に怒った指揮者の一人が私を銃の床尾板で突ついた。不意を衝かれた私は、一体何事かと狼狽した。私の傍らでこれを見ていた高橋上等兵はいきなり、これに掴みかかろうとしたが、ようやく阻止して事なきを得た。

日中戦争が、日本軍の敗北に終わると、中国民衆は、戦時中日本軍が犯した行為に激怒して「日本鬼」など、聞くに堪えない罵声や投石をして作業を妨害した。これに反抗する隊員を宥め聞かし「立派な堤防を構築して、敗戦国日本軍人としての償いをしよう」と固く誓いあった。

着工以来五カ月、艱難辛苦の末、ようやく希望の堤防が完成した。これはいかなる天災地変にも耐えうるものと自画自賛した。

あれ程憎しみをあらわにしていた作業現場周辺

の住民も完成した橋梁を見て驚愕乱舞して喜び、渡り初め式にも参加した。

我々作業隊員に復員船が迎えにくるというニュースが伝わったのは、昭和二十一年三月初めであった。これは作業隊の総指揮をとっていた蜂谷参謀に、復員船乗船業務の仕事があるからと、師団司令部に呼び戻されたことから現実味を帯びてきた。

我々作業隊は、数々の辛苦と思いい出を残し乗船地に向かった。

#### 近藤師団長不退転の決意

昭和二十一年三月に入ると、我が南支派遣軍も引き揚げ帰国が具体的になり、中旬には各部隊は乗船地で、復員船の入港を待った。わが師団は三月二十九日から乗船する事になった。

近藤師団長は福永専属副官を連れて中国側に行った。和やかな会話が続いたのち、近藤師団長と福永副官は一個分隊の親衛隊兵士に捕らえら

れ、これを広東市内を引き回そうとしたとき、その中国兵を突き倒し、自分の胸に突き付けられた拳銃を払いのけて睨みつけるのを見た時、私はただそれを見るだけしかない弱兵でしかなかった。

近藤師団長の「小官は日本軍人である。逃げ隠れしないから、部下将兵の帰国を見届けるまでは逮捕を猶予してほしい」との申し立ては冷やかに拒絶され、ある倉庫の一室に監禁されてしまった。

#### 帰国船上の大乱闘

敗戦という屈辱の年が明けて、昭和二十一年三月、我々南支派遣軍にも、待望の復員船送が始まった。我々を迎えにきたのは旧アメリカ軍の上陸用舟艇を改造したりバティ型艦艇と、砲門を取り外した旧日本海軍駆逐艦などであった。

中国の日本軍戦犯容疑者摘発は、乗船している復員船にまで及んだ。身に覚えのない罪なき者を報復的に裁くがごとく、タラップを駆け上がり、

船室に雪崩込んでくるのを人垣で阻止するが、その攻勢はとどまることを知らない。

六挺団に及ぶ師団將兵を見送りたい切実な願いが中国側に認められた近藤中将は、捕らわれの身でありながら福永副官と共に、小さなボートに乗せられ珠江を下る。そこには乗船しようとする第三百三十師団の將兵が集まっており、既に乗船した兵もいた。

何も事情を知らない將兵は、近藤師団長が見送りにきておられるものと思い、手を振ったりしただけで中国軍が、日本軍戦犯者摘発に躍起となり、これに激しく抵抗しているのを見た師団長は、素早く現場に急行し、拘束され不自由な身でありながら「戦争犯罪者はこの近藤だけだ」とタラップに立って両手を広げ、船内に乱入するのを阻止しようとした。しかし中国兵の銃剣に突つかれて鮮血に染まりながらも怯まず、復員船を出港させた。

その後、近藤中将は昭和二十一年十月三十一

日、中国広東省広州市上校場の刑場の露と消えたのである。銃殺の時、中国官憲が目かくしをしようとするのを拒否されたとの事である。我々鐘馗兵団將兵二万人は、近藤中将の庇護のもと無事帰国し、焦土と生活難の中を祖国復興のため闘った。この苦難の戦後を生き抜く力を与えてくれたのは人間近藤新八その人であった。

#### 戦争犯罪者とは

南支那広東省広川市の戦犯拘置所には、仏印、南海島からの分を含み、一時は千人近い容疑者が収容され、起訴された者は一七一人、その他は拘留される理由はなく釈放された。一般の人々の戦争犯罪者の認識は、極悪非道を犯したものとされるが、この戦犯はA級B級C級に区分され、B、C級の裁判は報復かつ非人道的に扱われた。

この広州の軍事裁判は、中国人が訴えた名前が似ているというだけで拘留した。証人として出廷する人は、まるで芝居でもするような大袈裟な態

度をする。そして中国人の証言がどんな常識はずれでも取り上げるが、日本人の証言は裁判官の気分ひとつにかかっている。

いわゆる戦争犯罪者と呼ばれた人達は戦争犠牲者であって、戦闘という特異な状況の下で、当然の事をしただけであって、戦争に対する罪を論ずるならば、軽重こそあれ、戦争を起こした者の責任といわなければならない。

戦闘中自分で命令しながら、敗戦になると戦犯の烙印から逃れるため、この命令を実行した部下を真犯人に仕立てたケースもあり、信じられない気持ちである。

#### 敗戦国日本の姿を見て

昭和二十一年四月一日、中国広東省虎門を出港した復員船が横浜に入港した時、絵に書いたように美しい富士山を見て、やっと祖国日本に帰った感じがした。横浜港からはしけ船で浦賀の岸壁に着いた。石段の頂きには、陸軍砲兵学校校舎があ

り、ここから東京湾が一望できた。全面焼野原である。校門には米軍の警戒兵が何人も立ち、警戒嚴重である。

歩哨の米兵の服装は戦闘服だが、ズボンにはきちんと折目がついているのが印象的だった。ここでアメリカ兵から嫌という程DDTの粉末をふりかけられた。校庭には軍服を着た日本女性がいる。厚生省復員局の職員である。これまで中国姑娘の筋肉質痩せ型の女性しか見ていなかったのに、軍服を着てふっくらと丸く背の低い女性に安らぎを感じた。この女子職員の軍服姿は、アメリカ兵より純潔を守るためか、それとも衣料不足によるものだろうか。

四月、浦賀は桜が満開で、我々帰国を歓迎して流行歌手田端義雄の「かえり船」の歌がスピーカーから流れている。

四月四日、復員式が挙行された。復員式に臨む兵士の態度は各自各様である。隊列を整然とする気持ちはないのであろうか。最後の一瞬だけでも

軍人である態度を示して欲しかった。

これまで生死を共にしてきた戦友達と別れる時がきたという感傷に耽っていると、突然周辺が騒がしくなってきた。これまで進級できなかった不満と、労役作業に派遣された鬱積がこうじてのこのようだ。

横須賀や横浜の市中では、米兵と手を組んで歩いている女性を見てこれが敗戦国日本の姿だなあーと実感した。日本の女性は戦争疲れしたケバケバしさが見られた。占領軍兵士を相手にしている売春婦をパンパンという言葉が流行していた。

### 原子爆弾の広島

四月四日、横須賀駅から特別列車に乗り、窓硝子のこわれた、敗戦国にふさわしいオンボロ列車は、不規則で停車する駅、通過する駅がまちまちだった。田園地帯の停車駅にはヤミ米を背負った人々がひしめき、われ先ぎに乗車しようとして車窓から乗り込んでくる。あまりの無秩序な行為を

阻止しようと、内側から懸命になったが防ぎきれなかった。

車中で一夜をあかし、大阪を通過して広島に停車した。車中から見る市内の風景は、全面焼野原で、目を遮るものは何もない。遠く瀬戸内の海原が、早春の日差しをキラキラと反射している。広島に落とされた新爆弾の事は、長崎のそれと同じ原子爆弾であることを知ったのは、南支那の戦野で敗戦になってからのことだった。今それをまのあたりに見て、その破壊力の凄まじさに「これでは敗戦やむなし」という実感が胸に迫った。

### 戦争犠牲者を哀れみて

人間万能ではない。勿論軍隊の指揮官としての私も全能ではなかった。どんな部下でも、彼らを育てた肉親がいる。その両親のことを考えると、一人だって無駄死にさせられない。

私は作戦命令を受領するとき、いかに損害を少なくするか、ということに心血を注ぎ、夜を徹し

て熟慮した。人間は万能の神ではないのだから仕方がないかも知れないが、損害の多いときは、これら部下の両親に深い責任を感じた。私は復員した時、靖国神社に参拝した。その時戦争で父親を失った孤児達と会った。この子供達の父親が出征する時は彼らは乳飲み子だったに違いない。それを一人前に育てた母は偉い、その労苦に対し心から敬意を捧げたい。